

彼の脳裡にほのかにかつ心地よい音をたてて漂うもの
～マックス・プロートの小説『ユダヤ人の女たち』(1911)における「ニュアンス」について

中 村 寿

„Etwas was ihm selbst zart und wohlklingend vorschwebte“ :
Über ‚die Nuance‘ im Roman „Jüdinnen“ (1911) von Max Brod

NAKAMURA, Hisashi

Zusammenfassung

In der deutsch-jüdischen Literaturgeschichte ist „Jüdinnen. Ein Roman“ (1911) von Max Brod (1884 - 1968) oft erwähnt, da der Roman aus der Auseinandersetzung mit seiner jüdischen Identität entstand. Im Roman stößt man auf die Frage, wie weit man den Zusammenhang der Figuren versteht, denn ihre Hintergründe werden nicht chronologisch nach dem Zeitverlauf, sondern oft in den Erinnerungen als Binnenepisoden erklärt. In diesem Beitrag versucht der Autor, anhand der Figurenanalyse die Position des jungen Brods als jüdischen Schriftsteller zu zeigen. Der Held Hugo verliebt sich in Irene, deren Bruder Alfred deutschnational gesinnt ist. Am Ende findet Hugo Alfred „nicht ganz behaglich.“ Trotzdem fühlt er, dass „etwas, was edel und jüdisch zugleich war“, ihn anzieht, obwohl er es nicht konkret ausdrücken kann. Aus dieser Befindlichkeit, dass Brods Protagonist zwar fühlen, aber nicht beschreiben kann, was jüdisch ist, leitet der Autor das Erwachen des jüdischen Nationalismus bei sich selbst her.

キーワード: ユダヤ系ドイツ文学, フランツ・カフカ, 『自衛——独立ユダヤ週刊新聞』, <プラハのドイツ語文学>, ボヘミア

Stichworte: Deutsch-jüdische Literaturgeschichte, Franz Kafka, Selbstwehr - Unabhängige jüdische Wochenschrift, Prager deutsche Literatur, Böhmen

0. はじめに

マックス・プロート(1884～1968)の小説『ユダヤ人の女たち』¹⁾は、ユダヤ人作家によるドイツ語文学についての研究では、作者が自身の同一性をめぐる議論に関わるきっかけとなった作品として、しばしば言及される。ところが、邦訳がないうえ、登場人物についての説明は時間軸に沿ってなされていないため、構図がきわめて描きづらい。本稿は、登場人物の分析を通じて、小説の存在意義と限界を明らかにすることを目的としている。

この小説に最初に注目したのは、ユダヤ民族主義(=シオニズム)の宣伝新聞『自衛』であった。プロート自身、第一次世界大戦期からパレスチナに亡命するまで、この新聞の編集に深く関わっていた。カフカもまたこの

小説の感想を日記に残している。小説の内容を記述するにあたり、カフカの日記記述と『自衛』の書評から、小説がユダヤ人の世論に投げかけた問題を整理する。分析では、登場人物のうち特にドイツ民族主義者のアルフレートに着目し、彼の存在によってほのめかされる「ニュアンス」の内容について検討する。

1.1. 『自衛——独立ユダヤ週刊新聞』

『自衛——独立ユダヤ週刊新聞』(1907～1938)は、オーストリア=ハンガリー帝国のプラハで創刊されたドイツ語によるユダヤ民族主義の宣伝機関紙である。その特徴は、チェコ語とドイツ語の二言語が話される多民族都市における宗教的少数派の新聞だったという点にある。20

* 本論文は科研費補助金(基盤研究C, 課題番号21K00408, 研究代表者:中村 寿)による助成を受けている。

1 読解にあたって筆者が使用したのは、次のリプリント版である。Max Brod: Jüdinnen. Ein Roman. München (Kurt Wolff). この版には出版年の表示がなく、プロート自身による「追記(Nachschrift)」が1918年付で記載されている。『自衛』の書評でヘルマンが使っていたのは、アクセル・ユンカー(Axel Junker)社による1911年版であった。1911年に書評が出ているだけでなく、出版社も明らかになっていることから、筆者は『ユダヤ人の女たち』の発表年として1911年とした。小説からの引用は、脚注ではなく、引用末に(頁数)で記す。

世紀への転換期のプラハでは、すでにチェコ語が多数派になっていた。チェコ系ユダヤ人の機関紙に倣い、ドイツ系ユダヤ人が自らの言語で創刊したのが、『自衛』である。その視座からは、ユダヤ人はユダヤ教徒であるだけでなく、ドイツ人・チェコ人ほかと対等な存在だと認識される。ハプスブルク帝国期の『自衛』は、二重帝国から中欧多民族連合への制度再編を通じて、その領土内でユダヤ民族自治を実現させようとしていた。このナショナリズムから、ユダヤ系のドイツ人作家には、ドイツ語によるユダヤの「国民文学」の創造が要請された。

1.2. 『自衛』とマックス・ブロート

ブロートが『自衛』の編集に関与するようになるのは、第一次世界大戦の戦中期である²。ところで、彼と『自衛』との接触は、戦前に始まっていた。きっかけはレオ・ヘルマンが彼の小説『チェコ人の女中』についての書評を同紙に発表したことによる³。ヘルマンは1910年12月頃から編集に関わった。ヘルマンが編集に関わる時期とブロートが『ユダヤ人の女たち』を執筆している時期は、ほぼ重なっていると推定される。

戦中期、ブロートは東欧からのユダヤ人戦争避難民に対する支援活動に関与した。避難民支援と同時に、彼は『自衛』の編集にも関与していく。戦間期のブロートは共和国在住ドイツ系ユダヤ人の利益代表者として政治活動もおこなった。1939年3月、ナチスドイツによる共和国侵攻がせまると、ブロートはカフカの原稿を携え、パレスチナへと出発した。ドイツ文学史で最も知られる彼の功績は、友人カフカの原稿をナチスによる焚書から守ったことである。

2.1. 『ユダヤ人の女たち』へのカフカの態度

『ユダヤ人の女たち』についての書評が『自衛』に掲載されるのは、1911年5月である。それに先立って、カフカが、書評にきわめて近い評価を日記に記している⁴。カフカもまたこの小説の欠点として、ユダヤ人の問題の欠如を挙げていた。ブロートは小説の素材としてユダヤ人を用いているにもかかわらず、彼らの問題は提起されない。カフカはその理由をユダヤ人ではない登場

人物がほとんど登場しないということに求めた。反ユダヤ主義者が登場しないと、ユダヤ人の存在意義は薄れてしまう。また、彼は主人公の凡庸さを挙げた。ユダヤ人の市民生活を描くためには、必ずしも傑出した主人公は必要ない。架空の登場人物であっても、ユダヤ人は英雄を欲していない。小説からカフカが読み取ったのは、ドイツ人の市民階級に埋没し、そこから離れることを望んでいないユダヤ人の姿だった。

2.2. 『ユダヤ人の女たち』と『自衛』

小説についての書評を『自衛』に発表したのは、上述したレオ・ヘルマンの従兄弟のフーゴ・ヘルマンである⁵。書評はブロートを「詩人」とはみなさないと結論づけた。その根拠としてヘルマンが引き合いに出すのは、「ユダヤ人の小説」の概念である。ブロートはユダヤ民族を代表する小説家になりえる可能性を秘めているが、いまだその域に達していない。その際、ヘルマンは描写の行き過ぎた詳細さを問題視し、それを「ニュアンスへの崇拜 (Kultus der Nüance)」⁶とよんだ。色彩、音響、臭いについてのブロートの描写はきわめて洗練されている。しかし、詩人の使命は世界を描写することではなく、解釈することにある。

しかし、ぼくらにとってほぼ支離滅裂な、世界の旋律をその無限の美しさにおいて描写することは、詩人の使命ではない。ぼくらは、この旋律が現実のなかでぼくたちの周囲に群がるありとあらゆる鳥の喉元からこだましているのを聞いている。もはやぼくは詩を世界の一つの模倣としては受け取らなかつた。詩人はなにかを加えなければならない。詩人は確固とした基盤に立ち、このもつれた旋律を解釈しなければならない⁷。

ブロートの小説は世界の模倣に過ぎず、現実の世界に対して、それとは異なる新しい世界を創造したわけではない。この書評の一週間後、ブロートは自らヘルマンに反論を試みた⁸。その際、ブロートが依拠したのは、解釈は小説家の仕事の埒外にあるという姿勢である。彼はみずからをホメロス、シェイクスピアに連ねた。彼らは

2 ブロートと『自衛』の履歴について要約するにあたっては、トラーマーの回想録を参照した。Vgl. Hans Tramer: Die Dreivölkerstadt Prag. In: Robert Weltsch zum siebzigsten Geburtstag. Tel Aviv (Biaton) 1961, S. 138-203.

3 Iris Bruce: Kafka and Cultural Zionism. Dates in Palestine. Madison (The University of Wisconsin Press) 2007, S. 30.

4 Vgl. Franz Kafka: Tagebücher. Kritische Ausgabe. Hrsg. von Hans-Gerd Koch, Michael Müller und Malcolm Pasley. Ffm. (S. Fischer) 1990, S. 159f. 翻訳については、新潮社版『決定版カフカ全集7——日記』1992年、谷口茂 訳を参照した。

5 Hugo Hermann: „Jüdinnen“. Ein Roman von Max Brod. Ein Gespräch darüber von Hugo Hermann. In: Selbstwehr – Unabhängige jüdische Wochenschrift. (=SW). 5 Jahrgang, 1911, Nr. 20 (19. Mai), S. 2f.

6 Ebd., S. 3.

7 Ebd., S. 3.

8 Max Brod: Mein Roman „Jüdinnen“. Eine Erwiderung von Max Brod. In: SW. 5, 1911, Nr. 21 (26. Mai), S. 1.

それぞれトロイア人とギリシャ人、ランカスター家とヨーク家の闘争を描写した。しかし、彼らはともに、対立し合う相手のどちらに正義があるかについては触れていない。作家は小説のなかで起こるできごとに干渉してはならない。プロートによるなら、小説家は世界を記述することはできても、それに意見を述べてはならないのだ。プロートは、ヘルマンの姿勢を評論家のそれにあたらしないと断言し、議論を打ち切った。

『自衛』はプロートによる反論につづけて、反論に対するヘルマンの再回答も載せている⁹。再回答で、ヘルマンは詩人を、平凡な詩人と優れたそれに区別した。内容ができごとについての記述に終わっているならば、それは小説家の力量が足りていないからである。優れた小説家であれば、できごとについて記述していながらも、それと同時に、小説家の態度がおのずから表明されることになる。

小説家にはそうするための権利がない、あるいはもっと適切な言いかたをするなら、自身の意見を表明する——すなわち判断の形式において表現する——権利がないということは確かだ。それゆえに、自身の芸術手段について熟慮する創造者からは、あらゆる判断に対する特異体質、すなわち、固有の意見、発言、解釈が発生する¹⁰。

最終的に、ヘルマンはプロート「超然主義者 (Indifferentist)」¹¹とよぶ。プロートの観察眼はすぐれているが、それゆえに小説は失敗している。彼は視覚、聴覚、嗅覚をたよりに、世界についての詳細な描写はしているものの、肝心な点が欠けている。彼には観察をするにあたって、定まった視点がない。カフカの指摘を踏まえると、彼の欠点は、ユダヤ人の社交界を描写するにあたり、どの角度からそれを観察しようとするのか、彼独自の視点が欠けているという結論が導き出される。

詩人は対象をある視点、つまり、彼の視点から観察し、そこから対象の中心まで潜入する。それから解釈が生じうる。しかし解釈は、集中して諸感覚を解き放ち、対象の周囲を回り、それを観照し、その臭いを嗅ぎ、それに触れることではない。この点では、これ以外の点においても、過ぎたるはなおよばざるがごとし、すなわち、より少ないことはより多いことにまざる。彼は真実——それが彼にとっての真実でしかないにしても——を言おうとしているのではなく、世界についての彼の無数の視

点しか言おうとしていない。ゆえにわたしはマックス・ブロートを偉大な詩人とは見なさない¹²。

この議論は重要な手がかりを与えてくれる。ヘルマンはプロートの「ニュアンス」に言及した。プロートは主人公フーゴの口を借りて、小説の結末で「このうえなく大事なニュアンス (die wichtigste Nuance)」(326)を擁護していた。「このうえなく大事なニュアンス」は、なにを示唆しているのだろうか？

3. 登場人物とその背景

『ユダヤ人の女たち』では、主人公フーゴが十七歳の年に過ごした夏季休暇のできごとがあつかわれる。相手役には二十七歳になる令嬢イレーネ・ポッパーが設定されている。小説の舞台になっているのは北ボヘミアの地方都市「テプリッツ (Teplitz)」である。

小説は主人公がテプリッツに帰省してきたその日に始まる。時間についての設定が明快であるいっぽうで、人物関係の構図は描きづらい。というのは、登場人物の背景は、小説中での時間の経過に対して、過去にさかのぼって説明されるからである。つまり、登場人物たちがテプリッツで集合することになるまでの履歴については、登場人物の語りと回想を通じて説明される。内容を再構成するのに先立ち、以下、登場人物とその履歴を整理しておきたい。

主人公は実科ギムナジウムの第七学年に所属する生徒である。休暇のために帰省してきたが、授業期間中はプラハで下宿している。発明家を志望し、工学に関心を寄せている。家族としては母親がいる。父親は数年前に死去し、兄がいたが、兄は恋人をめぐる決闘のすえ、撃たれて死んだ。主人公はテプリッツへの移住者である。生前の父親は「コリーン (Kolin)」で官吏をしていた。母親のルーツィエ・ローゼンタールは夫の死後、自身の両親が残した邸宅に住むため、テプリッツに移り住んできた。小説では、父の死後に支給された遺族年金だけでは、母と兄弟の生活には足りなかったという記述がある。母の相続した邸宅は大きく、一家の収入のため、一部を避暑客に貸している。主人公が帰省したときには、ロシア人の男爵夫人が滞在している。

もう一人、紹介が必要な人物がいる。一家がコリーンに住んでいたときの隣人の娘、オルガ・グロースリヒトである。彼女は家族同然の存在であり、主人公の幼なじみとして、彼を癒す役割を果たす。彼女もまた夏休みの

9 Hugo Hermann: Nachbemerkung. Von Hugo Hermann. In: SW. 5, 1911, Nr. 21 (26. Mai), S. 1f.

10 Ebd., S. 1.

11 Ebd., S. 2.

12 Ebd., S. 2.

あいだ、この邸宅に滞在し、その費用を支払う代わりに、一家のための家事労働をこなしている。

相手役イレーネは婚期を逃したかのように見える。実際、彼女は婚約を解消したばかりである。ところで、彼女の元婚約者は彼女に未練を残しており、彼女も同様である。家族は父、母、弟の四人家族で、一家はプラハのリンデン通りに家を所有し、そこで暮らしている。父親の職業は実業家、弟は医学生で、卒業試験を間近にひかえている。家族のうち、テプリッツに滞在し、主人公といっしょに時を過ごすのは、イレーネと母親である。

脇役として、彼女の親戚たちが登場する。第一に、テプリッツ在住で市参事のおじ、ヴァイル氏がいる。その家族として、夫人、長女のアリス、次女のフローラ、三女で十一歳の少女エルザが挙げられる。第二に、彼女の従兄弟のロッチェ、カミラのクッパー姉妹、その母がいる。ロッチェはイレーネよりも年長で、婚期を逃していることが強調される。上述のアリスとロッチェの婿候補として、裕福な年金生活者ヌスバウムがいる。彼はテプリッツの生まれではあるが、キリスト教徒の娘をめとり、当地のユダヤ人信徒団から破門され、この地を去った。妻を亡くしてしばらくたってから、彼は一人息子を連れて毎年夏に帰省をするようになった。息子ヨーゼフはフーゴと同じ、十七歳の青年である。

荘館には、彼女の親戚とヌスバウムの仲間のゲームート兄弟、若いロシア人のピトロフのほか、眼科医のタウベリスが滞在している。彼らは荘館に集まり、パーティ、テニス、ボーリング、ピクニックなどの余興を催しながら、避暑生活を送っている。小説の前半では、このような人間模様を背景に、イレーネに対するフーゴの感情の機微が綴られていく。以下、登場人物を中心に、テプリッツでの展開についての再構成を試みる。

4.1. フーゴ

彼は帰省前に実施された物理の試験に落第した。帰省後、彼は再試験を受験しなければならない。彼はこの事実をオルガには告げられても、母親には告白できないでいた。彼は落第の原因をある少女への失恋に求めている。この少女グレートル・マーラーはテプリッツの場面では登場しない。少女は小説のなかに断片的に挿入される回想の場面で言及されるのみである。

彼は彼女とのデートを帰省の直前までつづけていた。回想では、モルダウ川のほか、ベルヴェデーレ、「フラチャニ (Hradschin)」、エリザベート橋など、プラハの名所がしばしば出てくる。彼は友人とヘッツ島に集まり、猥談をしながら、少女たちが来るのを待った。彼はイレーネにそのときのことを次のように語っている。

水の流れは速く、朝の光を浴びて輝いていました。水は水車をかきわけて流れ、木の堰堤を越えて流れ落ちていきました。橋の上でしばしばぼくは立ち止まって、水が欄干の影のなかで濃い緑と茶色に色づき、島の端で、まるで固定された陸地のように動かなくなるのを見ました。この光景からぼくはまるで神が授けてくださったなにかを見ているような印象を受けました。ぼくは想像しました。ぼくたちはあそこの水上を歩いて渡ることができんじゃないか、しかも靴をはいたまま。そしてかかんで、掌をくぼませて、水をすくうことができるんじゃないか、喉の渇きを癒せるんじゃないか、と。それからテニスコートの近くの草むらに寝転がって、ぼくたち若い男は女を待ちました (151)。

彼の恋敵は「学生サークルの制服を着た太った男」(47)だった。彼らがグレートルといっしょにいたとき、彼女の視線はいつもその男を追いかけていたとフーゴは回想している。プラハの民族対立を踏まえると、ライバルがドイツ民族主義結社に所属していたことは明らかだ。

イレーネとの出会いは彼にとって、悲恋をふりきるきっかけになった。想いをかなえてくれなかったグレートルに復讐をするため、彼はテプリッツから新しい恋人の存在をほのめかそうとする。彼は彼の恋人としてハガキに署名してくれるよう、イレーネに頼む。彼女はそれに同意してくれる。こうしてグレートルに対する彼の復讐は果たされたかのように見える。しかし、彼が実際にハガキを投函したかどうかは、小説では語られない。

4.2. イレーネ

彼女はユダヤ人であるが、信仰やナショナリズムにはほとんど関心がない。それだけでなく、チェコ人にも関心がなく、ドイツの有産階級の生活に埋没しきっている。彼女の興味のほとんどは服装、余暇、そして結婚に集中している。母方のルーツはギリシャにあった。それは彼女のエキゾチックな風貌を通じてほのめかされる。ロンドンにも滞在経験があり、英語やフランス語にも堪能である。読者は彼女について、高慢ちきな俗物きわまりない印象を受ける。

彼女は自身をプラハのドイツ人社交界の華であると主張する。彼女は詩人ハーネンカムの手引きを通じて、社交界に入っていた。彼女は詩人の友人「ハヴァチェク男爵 (Baron Havatschek)」が自身に懸想したことを自慢する。フーゴは社交界について、次のように考察している。

なんと、彼女はプラハの社交界に出入りしていた、それもユダヤ人の女たちにとって到達しうるかぎり最高の…

彼女はつまりプラハのドイツ人社会の一部なのであって、その階層には貴族の最上層、最良のアーリア人の集団がつどっている。続いて大商人、裕福な法律家、財界人、良きキリスト教徒の中流階層と肩をならべる裕福なユダヤ人。彼女が語ってくれたところによると、これ以降のカテゴリーの等級は娘の持参金に応じて決定されるという。三万グルデンごとに等級の境界線が引かれるというルールは、参加者によって厳格に守られている (54f.)。

テプリッツの人間模様も、チェコ人に囲まれたドイツ人の社交界と同様、孤立している。その様子は、小説に出てくるユダヤ人の女たちのほとんどが知り合いであることから読み取られる。フーゴの母ルーツィエ夫人はイレーネの婚約破棄をフローラから聞いており、その顛末を彼に次のように語って聞かせる。

お嬢さんは昨年婚約なすって、お式の準備をなさっていた。それを、お相手のかたが唐突に取り消したっていうんです。それも持参金が少な過ぎるとか…新郎は弁護士のヴィンターニッツといって、こんなクズ男にはそう滅多にお目にかかれるもんじゃありません、そのクズは前にもピルゼンでべつ女を捨てたこともあったとか…数ヶ月も前から彼はお嬢さんと腕を組んで道を歩き、新聞という新聞には婚約の告知まで出して、お式の招待状まで印刷されたそうですよ…ポッパー家のお身内のかたがたは、新郎新婦のために新居まで借りられたと聞きました。フローラがすべて教えてくれました。おいたわしや、家具屋に家具を引き取らせたといいじゃありませんか。そんなことがあれば、人の心は深く傷つくに決まっていますよ、じぶんの身に置き換えてみても (89)。

ヴィンターニッツは自身の都合から婚約を取り消したにもかかわらず、彼女に未練を残し、彼女の訪問先まで追ってきた。彼女もまた、元婚約者への未練を断ち切れずにいる。事実、彼女はテニスコートで彼を見ると、自力で歩けなくなってしまう。

フーゴがイレーネに惹かれていく様子は、彼の視線から描かれる彼女についての描写から読み取られる。書評で指摘されていた通り、服装や家具調度についての具体的な描写は枚挙にいとまがない。イレーネの趣味のよさは、オルガの素朴さが引き合いに出されながら、際立たされる。彼は荘館の屋外テラスでイレーネと二人きりになれたときのことを次のように語っている。

彼女の頬がびくっと動くと、灰色の両眼が開いた。彼に

は明らかになってきた。この美しさはオルガやグレートルの美しさとは異なる。むしろ彼女の美しさはシラーの胸像のように、神経質であると同時に冷静さを感じさせる。ともかく、この女のいっぼう変わった様子に彼は魅了された。この感じは昨日、おりおりの瞬間に感じたのと同じだった。彼女は片手で別の籠椅子を引き寄せながら、こうささやいた。「これで外からは見えなくなりましたね」彼は赤面して、片手の指でこめかみの髪を梳き上げた (57)。

フーゴが荘館に通いつめるうちに、イレーネとの距離は近づいていく。彼女は彼の訪問に先立って、着用するドレスの色を知らせ、それと同じ色のネクタイをしてるように、彼に頼む。取り巻きが彼らのしめし合わせに気がつき、彼らをはやし立てると、彼女は満足そうな笑みを浮かべる。彼らが最接近するのは、ボーリングの場面である。そこで彼女は元婚約者への断ちたい想いを彼につたえると、彼らはアリスの弾くピアノの伴奏に合わせて、『ルクセンブルク伯爵』¹³のワルツを踊る。そこで彼女は彼を「小柄な男爵」(145)とよんだ。また、彼女がフーゴを憎からず想っていることは、オルガに向けた言葉から読み取られる。プラハのユダヤ人がテプリッツのユダヤ人の言語を「イディッシュ語 (Jargon)」(69)だと軽蔑する場面は、ユダヤ人の階層意識を垣間見せる。

健康で、よく肥った幼獣のようなお尻に、大飯食らい、重たい体で、パンには指二本ぶんのバターをたっぷりつけて、四人ぶんのお働き。自家製のリキュールをつくって、朝夕のお祈りを欠かさず、家のまわりでわめきちらす… (69)

フーゴは自身とイレーネが互いに惹かれていく根拠を、互いが経験した不幸に見いだしていた。不幸とは落第と婚約破棄である。しかし、それはフーゴの想像であったことが明らかになる。彼に対する彼女の関心は、彼女に対する彼のそれに比べると、ずっと少ない。

フーゴは二人のおもしろくもなく、褒められることもない関係を、彼ら双方が同じ程度に分け合っていると思っていた。しかし、イレーネは卑下したり、あるいは自身を低い立場に置きながら、じぶん自身を観察しようとするそぶりは見せなかった。フーゴを見るにあたって、気まぐれに慈しんだり、気まぐれに放り投げたりする玩具さながら、彼を露骨に見下した。彼女にとってじぶん自身はいつまでも徳の高い人物、選ばれた人物であって、

13 レハール作曲のオペレッタ、1909年初演。

それは幸福であっても不幸であっても変わらなかった(188)。

彼女のふるまいに一喜一憂する自身への心理分析の結果、彼は彼女に恋をしていたのではなく、恋愛に恋をしていたのではないかという考察結果を導き出す。彼はイレーネとの恋愛を「早過ギタ春 (Amor praematurus)」(183)と結論づけた。それ以降、彼の気持ちはすっかりと醒めてしまう。外国語の知識をはじめとする彼女の洗練されたふるまいは、彼には傲慢さそのものとして映るようになる。こうして彼による語りの対象は彼女から弟のアルフレートに移行していく。

4.3. アルフレート

小説の前半ではフーゴとイレーネの感情の機微に頁数が割かれるが、後半は喜劇の要素が強くなっていく。その背景には、ユダヤ人、ドイツ人、チェコ人による民族対立がある。それを導入する人物として設定されているのが、イレーネの弟アルフレートである。ドイツ民族主義者としての彼の外観には戦士のような男らしさが与えられている。

彼(=アルフレート)の顔は茶色で、イレーネと母親の顔よりもずっと濃かった。明るい色のひげが唇のうえにかろうじて見えた。髪は短く刈りこまれていたが、濃く、そのうえ巻き毛だった。毛髪は頭蓋骨を覆う、いかなるものも貫通させない、さながら硬質な薄皮をなしているかのようなだった(220)。

彼は「オルトラー・アルプス (der Ortler)」に滞在し、夏山登山を計画していた。ところが、彼は眼病にかかり、治療が必要になった。タウベリスの治療を受けるため、彼はテブリッツに来る。荘館に着いてからというもの、姉と弟は諍いを繰り返している。イレーネは弟が幼かったころ、従姉妹のカミラに好意を抱いていたことに言及する。話の展開にとって示唆的な場面のため、ここに引用する。

「それじゃカミラ・カップーのことはもうどうでもいいと？初恋なんてとっくの昔に忘れたと言うのかしら？」イレーネは少し離れた場所から彼(=アルフレート)に向かって、口先こそ穏やかだが、毒矢同然の台詞を放った。イレーネの言葉は彼を苛立たせたようだったが、両親が彼をなだめていた。「ほっとけよ」彼は咳払いをした。「おれにとっちゃ女なんかみんな同じさ」彼はきびずを返した。「特にユダヤ人の女なんか」(223)

上の引用からは、彼のミソジニーを指摘できる。彼はユダヤ人であるにもかかわらず、宗教やシオニズムにはほとんど関心がない。彼はドイツ民族主義者のオットー・ヴァイニングガーに心酔している。ところで、それについて彼が語るときには、自身による読書の成果を引用するのではなく、他人の意見を再引用することで済ませている。このような姿勢からは、彼のおおらかな性格が認められる。彼は自身の性欲についても、あけすけに語る。

読書するよりもむしろ友人との議論から、彼(=アルフレート)はヴァイニングガーに通じていった。彼は自ら読んだヴァイニングガーではなく、ヴァイニングガーが引用されるのを聞き、それを引用した。それでも、彼の頭にはまったく混乱はなかった。むしろ、実践的な知識、経験、本能の本流へと、彼の人生観は美しい規則性を描きつつ、合流していった。彼にとって女は戦慄の対象だった。女とはいっさい関わらない！「そうだろう」と彼はフーゴに打ち明けた。「おれは月一回、一グルデン二十で済ませるぜ。それですっきりさ」(229)。

プラハに戻る二日前の8月30日、フーゴはアルフレートといっしょに郊外の「シェーナウ (Schönau)」に赴き、ヌスパウムとピトロフの演説会に出席した。彼らはともにユダヤ民族の問題に言及したが、その内容は大事でない。それよりも、ヌスパウムがイレーネを、ピトロフがカミラを同伴していたことが重要である。フーゴとアルフレートは会場のテーブルには着席しなかった。彼らは壁際の廊下から経過を観察した。そこでフーゴはアルフレートに性の経験を打ち明ける。それを聞くと、アルフレートは女にとって男の純潔は有意義だと言い、フーゴを慰める。

「君はいくつになった？」アルフレートは議論に興味を示し、こう訊いた。「もうじき十八歳になる」フーゴは嘘をついた。「変だな、みんながぼくに同じことを訊く、何歳だって」「十八か…まあ聞きな。そんなら君がいまだに童貞 (Jungfrau) だということはまったく不思議じゃない。そんなことに気を病む必要はない…」「でもぼくは…」アルフレートは彼の発言をさえぎった、アルフレートがじぶんの考えを最後まで述べようとするときにいつもそうするように。「おれは二十四歳になるまで自制したぜ。正直に言えば、おれはそれから自制してないことを悔いてもいるんだ…女には男から性の純粋さを要求する権利がある、おれはこんなふう考えているよ」(244f.)

二人の会話から、アルフレートが演説会に参加した理由が明らかになる。彼はピトロフの妨害を画策していた。

明日の夕方、カミラとピトロフの婚約発表が予定されている。演説会の失敗はピトロフの醜聞になる。彼はピトロフについての醜聞を流すことを通じて、彼らの婚約を妨害しようとした。アルフレートは自身の属する民族主義の学生体操協会「ヴォータン (Wotan)」(254)の同志を会場に集めておいた。

ピトロフの演説が始まると、学生は会場に乱入し、聴衆と乱闘騒ぎを起こす。ピトロフは演説を中断せざるをえなくなる。イレーネは互いに殴り合う学生と客のなかに取り残される。そこでフーゴは互いに組み合う男たちから彼女を救い出そうと、人垣へと突入していく。フーゴは彼女に接近するが、ヌスバウムとタウベリスを両脇にしたがえた彼女は、彼を一瞥することもなく、悠然と会場を去っていく。こうして、演説会の章は終わっている。

4.4. オルガ

演説会はフーゴにとってイレーネへの想いを最終的に断ち切るきっかけになった。会場から立ち去る際、背の高い彼女は小柄なフーゴを上から見下ろす格好になった。彼はこのイレーネの態度を自身に対する侮辱と見なし、その復讐のために自死すら考えてしまう。彼を傷つけるイレーネに対して、オルガには傷心の彼を癒す役割が与えられる。彼女たちはともにユダヤ人の女ではあるが、イレーネとオルガは対照的な存在である。前者は年上で都会育ちの洗練された女であるのに対して、後者は農村育ちの素朴な娘として描かれている。

演説会からの帰途、テプリッツ城の庭園を歩いているとき、池のほとりにさしかかると、入水自殺の試みが彼の脳裡をよぎる。彼は柵をまたいで池に近づくのだが、実際、足を滑らせて池に滑り落ちてしまう。

オルガはフーゴの帰宅を待っていた。彼の家に宿泊中の男爵夫人はピトロフと面識があり、演説会に出席していた。オルガは夫人から、演説会の顛末を聞いていた。彼はオルガに自殺の試みをつたえる。彼女は彼に、恋の感情を制御できるようにならなければならないと諭す。彼が恋愛、成績、エンジニア、発明家の理想がことごとく頓挫したことを打ち明けると、彼女はこれからすべてうまくいくと彼を励ます。

彼は顔をオルガの膝にうずめる。彼は眼を閉じると、その前に広がる暗闇から「始まりも終わりもない安らぎ」(277)を見る。オルガは悲しむフーゴの頭をなでて、なぐさめる。このようなオルガの人物造形は農道に置かれた素朴な聖母像を彷彿とさせる。

4.5. エルザ

エルザはヴァイル家の三姉妹の末娘で、イレーネの従

姉妹にあたる。彼女は水鉄砲をもって、だれとも構うことなく、水滴を発射し、相手を驚かせて楽しんでいる。この悪戯少女は喜劇にオチを引き寄せる際、重要な役割を果たすことになる。

翌日の8月31日の昼ごろ、フーゴはテプリッツの駅前通りを歩いていると、エルザとヨーゼフが口論をしながら歩いているのを見つける。ヨーゼフが汽車賃をもっていないことに対して、エルザは不満だった。フーゴは彼らに旅費が必要な理由を尋ねる。すると、エルザの家出計画が明らかになる。出発のためらうヨーゼフにフーゴは駆け落ちをそそのかす。

「冒険さ」、フーゴは励ますように叫んだ。「ぼくらだって冒険はしたいさ…」エルザはさも当然だと言わんばかりだった。「そんなたいそうなものかしら？何百回もあったことじゃない。毎日だって起きてるじゃない。あたしは新聞だって読むんだから」じぶんの発言の正しさを裏づけるかのように、彼女は樹々の向こうに見える駅の構内へと早足で向かっていった…すぐにヨーゼフが彼女のあとを追った。フーゴも急がなければならなかった…(287f.)

駅で二人を見つめながら、フーゴはアルフレートのことを思い出す。アルフレートは演説の妨害を通じて、自身からカミラを奪ったピトロフに対する復讐を果たした。アルフレートに倣い、フーゴは自身からイレーネを奪ったヌスバウムに復讐をすることを思い立つ。彼の計画はエルザとヨーゼフを駆け落ちさせ、ヨーゼフを少女誘拐犯に仕立て上げることだった。彼は息子を誘拐犯にすることを通じて、父親の管理責任を問い、親子の醜聞を広めようとたくらんだ。そこでフーゴは母から受け取っていた旅費と生活費から十グルデン紙幣を取り出し、それをヨーゼフに握らせる。彼はついに受け取った。エルザとヨーゼフは鉄道でテプリッツを出発した。

4.6. ヌスバウム

エルザとヨーゼフを見送ったのち、フーゴはイレーネから誘われていたピクニックに出かける。昨夜のフーゴの憔悴ぶりを心配したオルガは、彼の様子を見守るため、ピクニックに同行した。アルフレートはすでにテプリッツを去っていた。演説会は失敗したにもかかわらず、ヌスバウムとピトロフはそれぞれイレーネとカミラをとめない、彼女らはなにもなかったかのように同行している。この遠足で、ヌスバウムに対してしかけたフーゴの復讐は果たされる。

彼ら一行は市電で郊外の「アイヒヴァルト (Eichwald)」に向かう。彼らは目的地に着くと、市街を散策したのち、

森のなかで休憩を取る。彼らが車座になって座ると、イレーネがゲームの提案をする。このゲームは陳腐極まりないが、それからはオルガを傷つけたいという彼女の意図が明らかに読み取られるため、以下に引用する。

一人が輪から外に出るの。——残った人はそれからゲームの親に出て行った人についての悪口を言うの。親はその悪口をリストアップし、該当者に悪口を読み聞かせる。該当者はじぶんを最も傷つけた悪口を告白し、だれがこの最大の悪口を言ったのかを当てるの (301f.)。

イレーネはオルガに出ていくようにうながし、ヌスバウムを親に指名する。ヌスバウムはオルガについての悪口を集めるのだが、そのなかに「あなたは男という男の尻を追いかける」(306) というものがある。オルガはそれがイレーネの悪意によるものであることを察知し、イレーネに突っかかっていく。抗議をしながら、オルガは取り乱し、泣き出してしまふ。フーゴには、少女の誇りを汚されたオルガに慰めが必要なのかわかっている。イレーネはフーゴを牽制する。彼はオルガに手をさしのべることがついにできなかった。

オルガは先に帰ってしまう。場の雰囲気は白けてしまい、荘館の一行も引き返すことを決める。彼らが停留所に着くと、オルガはすでに出発してしまっていた。テプリッツからの鉄道が着くと、血相を変えたヴァイル夫人が警官を連れて降りてくる。テプリッツの駅で目撃されたのを最後に、エルザとヨーゼフは姿を消した。夫人はヨーゼフがエルザを誘拐したのではないかと考えた。彼女は警察当局に捜索願を出した。被害者の母親は、容疑者の父親が被害者の姉と遠足に出かけているという情報を警察に提供した。ヌスバウムは誘拐犯の父親として警察署で尋問を受けることになった。警察署に着くと、一行には、エルザとヨーゼフが無事保護されたという伝言がつかえらる。夫人の誤解により、テプリッツ近郊には、少女誘拐、快楽殺人、鉄道事故などの醜聞が広まっていた。

フーゴが帰宅すると、なにごともしなかったのかのように、オルガが彼の荷物をトランクに詰めている。彼はアイヒヴァルトでオルガが侮辱されたとき、かばってやれなかったことを詫げる。それに対して、彼女はイレーネに対する彼の想いは承知しているだけでなく、イレーネの態度には心当たりがあると答えた。

きょうの午前中、ヴィンターニッツがフーゴの自宅まで、彼を訪ねてきた。そのとき、イレーネが家の前を通りがかり、オルガと元婚約者が話しているのを見た。イレーネはオルガとじぶんの元婚約者が男女の仲にあると誤解したにちがいない。オルガに対する悪口はオルガへ

の嫉妬の結果であろう。オルガへの侮辱はイレーネの本心ではないだろう。この説明により、オルガとイレーネのあいだのしこりは解消され、フーゴには後ろめたさを感じることなく、テプリッツを去る準備が整う。この挿話は見逃されてはならない。イレーネのことを忘れられない元婚約者はフーゴと彼女の仲を疑い、フーゴに談判をせまりに来た。第三者が見ても、フーゴに対するイレーネの愛は真剣だった。イレーネはただフーゴを弄んでいただけではなかった。

4.7. タウベリス

翌日の午前、プラハに戻るため、母親とオルガに付き添われて、フーゴは駅に行く。出発時間がせまり、彼は鉄道に乗車し、窓から外を見ていると、ようやくイレーネがタウベリスに付き添われてホームにやって来る。彼女は彼にエルザの誘拐事件の顛末を聞かせた。少女誘拐は新聞で報じられた。息子の誘拐未遂は父親の醜聞となり、もともとヌスバウムを快く思っていない親戚はこの機会を逃さなかった。演説会の失敗と息子の不始末の責任を問われ、親子はテプリッツから姿を消した。つづけて、カミラとピトロフが婚約を解消したこともつたえられる。これでフーゴとアルフレートはともに、じぶんの恋敵に対して、復讐を果たすことができた。

プラハの下宿に戻ったフーゴは再試験の準備に集中する。二週間後に実施された試験に彼は合格した。彼がオルガに合格を報告すると、オルガは、自身とテプリッツの製本屋クライン氏との婚約を知らせてくる。イレーネからの手紙で、彼はイレーネがプラハにいることを知っていたが、会う勇気がもてないでいた。テプリッツの痕跡を見つけようと、プラハの路地をあちこち歩くことが彼の習慣になっていた。

ある日の午前中、彼がいつものように路地を歩いていると、アルフレートから肩をたたかれる。アルフレートは彼に姉とタウベリスの婚約をつたえた。アルフレートは彼を自宅へと招待する。イレーネはうってかわって明るくなっていた。タウベリスが到着すると、彼女は婚約者に、フーゴを「この家の古くからの友人」(334)として紹介する。フーゴはイレーネの家族とタウベリスとで食事をとり、心から婚約を祝福する。それから彼はプラハ随一の繁華街グラーベンを通って下宿に帰る。そんな彼に語り手は励ましを送り、こうして小説は終わる。

5. 「ニュアンス」

書評が小説の欠点を作者プロートの写實的過ぎる描写に見いだしていたことはすでに指摘した通りである。書評では、プロートの態度が「ニュアンスへの崇拜」とよばれていた。彼が世界を記述していることは確かだが、

その世界は不安定だった。

彼はニュアンスにこだわり過ぎることを通じて、独自の世界観を呈示することに失敗していた。ヘルマンの指摘に倣い、「ニュアンス」に注目すると、『ユダヤ人の女たち』を執筆していた当時のプロートの意図が見えてくる。

彼が問題提起しているのは、ユダヤ人の女たちに対するドイツ系ユダヤ人のまなざしではなかっただろうか。彼はユダヤ人の女たちの特徴について、イレーネに次のように語らせている。

彼女たち（＝ユダヤ人の女たち）は自惚れ屋でとっつきづらいんです。彼女たちは単に、じぶんたちがより良いなにかだと思っているだけなんです。どんな境遇に置かれても、いつまでも。彼女たちを強くし、力づけてくれるものは、なに一つとして存在していないのに… (129)

女には結婚が必要だという認識において、フーゴとイレーネは一致している。しかし、結婚せざるをえない彼女たちの感情に対する理解の程度において、彼と彼女のあいだには差異がある。それはイレーネの出席した不幸な結婚式についての挿話から読み取られる。彼女の友人は二十九歳のとき、五十五歳の子持ちの寡夫と結婚した。彼女の結婚式はイレーネにとって不幸な式典そのものなのだが、彼にはその理由が理解できない。新郎の適齢期になる娘はこの結婚を祝福しない。イレーネは娘に同情し、じぶんと変わらない年齢の女を母親とよぶことはできないと主張する。しかし、彼には新婦と娘の状況について、やむをえないこととしか思われえないのだ。ユダヤ人の女に対するアルフレートの意見もまた、イレーネと同じである。フーゴからイレーネとタウベリスのなれそめを尋ねられると、アルフレートはこう答える。

「どうやってあいつらが気持ちを通じ合わせたかって？ おれが知るもんか…男ならこうしたユダヤ人の女たちのあつかいには慣れていなくちゃいけないってことさ。あいつらはろくでなしそのもの、とことんまで打算的、骨の髄まで抜け目なしだ。君にもわかるだろう」アルフレートは彼の体をきつく押した。「おれたち男はあまりにもうぶで、純粹過ぎる。おれたちにはおれたちの理想の世界観があるからな…」 (325)

アルフレートはフーゴにテプリッツ来訪と退去の理由を告げる。彼はイレーネとタウベリスを近づけるために来た。カミラとピトロフを引き離すために起こした騒動のために、彼は追い払われた。

「住民集会のことだね…」フーゴは笑った。「ありゃ傑作だった」アルフレートは得意げだった。「みんなおれのことを思い出さず！ あんな女たち、それにあんな親族のわがママを許しちゃいけない。これがいまのおれの原則さ。最後に勝つのはおれたちだけさ、おれたちのゲルマンの世界観さ…」フーゴは、アルフレートの言うことは多くの点でもっともだと思ったにもかかわらず、その発言からは後ろめたさをも感じた。このうえなく大事なニュアンスがない、彼（＝フーゴ）の脳裡にほのかにかつ心地よい音をたてて漂うものであるなにかが。彼はついにそれを表現することはできなかった…高貴かつ同時にユダヤ人のものであるなにか。彼はそれをいまだに体験したことがなかったにもかかわらず、その存在を予感していた (326, 傍点部筆者加筆)。

アルフレートの世界観には「このうえなく大事なニュアンス」がない。アルフレートとフーゴの世界観の差異は、ユダヤ人の女たちに対する彼らのまなざしから認められる。前者のまなざしは一方的で、彼女たちになんの存在価値も認めていない。それに対して、後者は、結婚にすぎない彼女たちの生きかたをしかたのないことだと考えながらも、そんな生きかたに同情をしめしている。もっとも、フーゴの同情は、ユダヤ人の女たちだけでなく、女性一般に向かっている。

彼（＝フーゴ）は一般的な女の悲しい運命、とりわけユダヤ人の女たちの運命を思った。彼女たちの教育には結婚以外にはいかなる目的もなく、この博打がうまくいかなければ、彼女たちは中途半端な教育のみで、人生をよるべなくふらふらと漂わなくてはならない (174)。

女たちを民族に置き換えてみよう。すると、アルフレートはユダヤの同一性になんの関心も抱いていないことになる。いっぽうで、フーゴは受動的ではあるものの、同情的であるということが明らかとなる。彼らの対照からは、1911年当時のプロートの限界が見えてくる。

アルフレートがドイツ民族主義を奉じるユダヤ人であることは一義的であった。ユダヤの同一性をいっさい顧みようとしないアルフレートのドイツ民族主義に対して、フーゴは少数派の同一性について、「彼（＝自身の）の脳裡にほのかにかつ心地よい音をたてて漂うもの (etwas was ihm selbst zart und wohlklingend vorschwebte)」 (326) があるという発言を残した。しかし、ユダヤのニュアンスの内容を問われると、プロートには説明することが難しかった。

ユダヤのニュアンスについてはその存在がほのめかされるのにとどまっているのに対して、ドイツ民族主義の

ニュアンスは、作中のところどころに配置されている。

たとえば、ボーリングのレーンのある酒場『蹄鉄場亭(, Zum Hufschmied “)』(124)がそうだ。バーカウンターからはビールの蒸発する微くさい臭いが漂ってくる。初めてのボーリングでスベアを取ったフーゴは、蹄鉄場亭を「ドイツの田舎風の心地よさ (deutsche ländliche Behaglichkeit)」(134)に満ちた場所だと思う。いっばうで、ボーリングを「暴徒の娯楽(Pöbelvergnügen)」(137)と評し、自身とイレネにはもっとロマンチックな場所がふさわしいと独り言ちる。

アルフレートからは、より鮮明にドイツ民族主義の象徴が認められる。ポッパー家はイレネが語っていたほど裕福ではなかった。敷地内には「酒蔵(Spirituosenniederlage)」があり、建物内には蒸留酒の「ツンとした臭い」(327)が漂っている。アルフレートの部屋は質素な「スパルタ風の部屋 (spartanische Wohnstube)」(329)で、針金格子の兜とサーベル、デューラーの自画像が飾られている。これらがドイツ民族主義を象徴していることは、おそらくまちがいない。その一方で、ユダヤ民族の象徴物は不在である。象徴物の有無からは、プロートにとってドイツの象徴は自明であったが、ユダヤのそれは未知のものだったという推論が成り立つ。『ユダヤ人の女たち』では、ユダヤ民族の象徴はほめかされるにとどまった。

プロートはユダヤ民族を代表する小説家になりうる可能性があるが、いまだその域には達していない。書評の

評価は、次のように言い換えることができるだろう。プロートはユダヤ民族を象徴するものの存在をほめかしはしたが、それを具体的に挙げることはしていない。民族の象徴物が存在することをほめかしはしたが、彼にはそれを名指しすることはできなかった。これが『ユダヤ人の女たち』執筆当時のプロートの限界であろう。

6. まとめと展望

フーゴ・ヘルマンによる『ユダヤ人の女たち』に対する書評から、当時のプロートの評価を明らかにした。小説の内容を再構成するにあたっては、登場人物の関係抽出を重視した。前半は主人公のフーゴとイレネの恋愛があつかわれるが、後半はそれよりも喜劇の要素が強くなった。彼女の弟アルフレートの登場により、主人公はユダヤの同一性に気づかされた。小説を通じて、ドイツ民族主義の象徴は記述されていたが、ユダヤのそれはほめかされるにとどまっていた。『ユダヤ人の女たち』執筆当時のプロートは、ユダヤ民族主義の存在をほめかすことはできても、その象徴を名指しすることはできなかった。

この評価に対する反省から、小説『アーノルト・ベア——あるユダヤ人の宿命 (Arnold Beer. Das Schicksal eines Juden.)』(1912)が生まれた。『ユダヤ人の女たち』から『アーノルト』にいたるプロートの精神遍歴の展開を描くことが、筆者の次の課題として挙げられる。